

「日本沖合での台風」(1898)

早朝当直(午前四時から八時)真つ最中の午前六時を知らせる鐘が鳴ったときのことであった。朝食を終えたばかりであったが、甲板^{かんぱん}上の見張りはその場で、また、その他の乗組員全員はボート(小型帆掛け舟)のそばで待機するように命令が下った。

「面舵^{おもかじ}！ 面舵いっばい！」と船首を右に回すように、船長が大声で指示を出した。「上部帆を上げる！ 先端三角帆^{フライングジブ}を下げて！ 前方三角帆^{ジブ}を風上^{かざかみ}にもどして、先端下帆^{フオースル}をおろすんだ！」『ソフィア・サザランド』号は一八九三年四月十日襟裳岬^{えりも}の近くを航海しており、日本沖合に向かっていた。

その後、船内は騒然としていた。何しろ六隻のボートに十八人の船員たちが押し寄せたからだ。船員のなかにはボートを降ろそうとしている者もいれば、綱を解いている者もいた。また、舵取りたちは羅針盤や救命用小型水樽、そしてこぎ手たちは弁当箱を持って甲板に現われた。捕獲担当船員たちは、二、三丁の散弾銃と、小銃を入れた重たい弾薬箱とを脇に抱えて甲板上をよろよろと歩いてしたが、まもなくそれらはすべて、油布と手袋もろともボートに詰め込まれた。

最終命令を船長が出し、各ボートに三人ずつ乗り込み、三組のオールでこいで出航した。風上^{かざしも}に向かうわれわれのボートは、オールをこぐのに余分な時間が必要だった。風下^{かざしも}に向かうボートもまもなく一隻、二隻、三隻と帆を揚げて出航し、追い風^{かざしも}の方向に進んでいった。

一方スクナー型帆船^{はんせん}(通例二本以上の帆柱を持つ縦帆式帆船)は、不測の事態になってもボートが順風^{はんせん}ののって母船にもどってこられるように、風下に舵をとった。

その日は、すばらしく好天に恵まれた朝であった。われわれが乗ったボートの舵取りは、不吉にも首を横に振り、太陽が昇ってくるのを見つめて、今後の見通しについて、「太陽が朝、まっ赤になっているときは、要注意だ」とつぶやいた。太陽は怒ったようにじろつと見下ろしており、白くふわふわした雲の中にある黒い部分が赤面しておびえているように思えたが、まもなくその姿を消した。

北方にある襟裳岬の頂は、黒く不気味にそびえており、それはまるで巨大な怪物が深海から顔をのぞかせているようだった。冬の雪は日光によって完全になくなっただけではなかったが、ぴかぴか光る白い斑点状になって岬を覆い、その上をそよ風が海のほうに吹いている。大きな海カモメは、微風のなか、羽をばたばたさせながら半マイル(約八百メートル)以上海面を水かきのある足でかいて、ゆっくりと飛び上がる。その音が聞こえなくなったかと思うと、キョウジョシギという鳥の大群が、ヒューツという羽の音とともに風に向かって飛び立つ。そこにはおびただしい数

の鯨の群れが戯れており、蒸気機関車の排気音のような音をたてている。ツノメドリが、耳ざわりで不快な音をたてており、われわれの前方に小集団で群がっている六頭のアザラシに、警戒態勢を取らせてしまった。そのために海中にいたアザラシは、海面に飛び上がり逃げていった。海カモメが、悠々と長い距離を堂々たる態度で曲線を描きながら、われわれのまわりを飛んでいた。故郷を思いださせるようなイエズズメが、船首楼せしゆうろう（船の前方で高くなっている部分）の上にならずうしく止まっており、首を横に向けてのんびりとさえずっている。われわれの乗ったボートは、まもなくアザラシの一群のあいだに入った。バーン、バーンという銃声が風下のほうで聞こえていた。

風が徐々に激しさを増してきている。午後三時までにはわれわれが乗ったボートに十二頭のアザラシが捕獲されており、このまま狩りを続けるべきか撤退すべきか思案していると、「撤退」を示す旗がスクーター型帆船ミズンマストの後方帆柱に掲げられた。風が勢いを増し、気圧も下がっているため、ボートの耐用年数に悪影響を及ぼすのを船長が心配し始めていることは明らかだった。

われわれは風にあたる面積を少なくするために縮帆しりふを一本だけ揚げ、追い風に乗って引き返しはじめた。舵取り係りの船員は、ぐっと歯を食いしばりながら両手でしっかりとオールを握りしめ、落ち着きのない目で前方にあるスクーター型帆船をにらんで警戒態勢を取った。われわれは海面上で舞い上がり、ボートの主帆脚綱しゅほあしづなの部分や船尾も浮かび上がってしまった。海水には強風で黒い細波さいなみが立ち、突風や大きな白波のためにわれわれのボートがいまにも転覆してしまうのではないかと、舵取り係りの船員が恐れた。波は、まるで上機嫌でお祭り騒ぎをしているみたいだ。その動作はこの上なく奇妙で、上下左右あらゆる方向に荒れ狂っている。そしてついに、乳液状の白く泡立つ波頭をもつ不安定な緑色の大海が、ドーンドーンという音を立て海面から浮き上がり、他の波を見えなくしてしまった。だが、一瞬ではあるが波が違った状態になり、再び元の姿を現わす。日のあたるところでは、波は取り留めもなく色彩を変える。大きめの細波も小さな細波も、そして小さな唾液状の泡やしぶきも、銀が溶けだしたような色をしている。海面から濃緑色が消え、まぶしそうな銀白色の海になるわけだ。だがそれも、そのうちに消え去り、手に負えない無用の長物の重々しい乱気流になる。このように不気味で不吉な予感がする海水は、浮き上がったたり、砕けて泡となったり、また波がうねったりを繰り返す。海水が打ちつける音や泡、そして銀色になるのは、太陽が昇るとともになくなってしまう。しかしその太陽も、西や北西の方から突然音を立てて流れてくる黒い雲に隠れてしまい、あたり一面暗闇に包まれる。これが、嵐の到来の前触れだったのだ。

われわれの乗ったボートは、まもなくスクーター型帆船に到着したが、戻ってきたのはわれわれ

れが最後であった。すぐにアザラシの皮をはく作業が行なわれ、それに続いてボートと甲板の水洗いがあった。そしてやつとのもので、下にある船員部屋の火がバチバチと燃え盛る暖炉のそばで休息をとることができた。洗濯や衣服の着替えが済むと、栄養豊かなボリウム満点の温かい夕食が待っていた。それまでわれわれはスクナー型帆船で、夜明け前に南の方角に七十五マイル（約百二十キロメートル）も航海を続けていたのだった。これもアザラシの大群に出会うためだった。この二日間の狩りでは不運続きであった。

その後、午後八時から真夜中までわれわれは初夜当直にあたった。まもなく突風が吹きだしたので、船長は船尾楼（船の後方で高くなっている部分）を上がったたり下がったりして、睡眠はあまりとれない様子であった。上部帆はすぐに揚げられてしつかりと固定され、次に先端三角帆が降ろされ帆柱に巻きつけられた。この頃までには大波がうねり始め、ときには甲板上にあたって泡となり、海水が流れ込み、ボートを粉々に砕くおそれがあった。午後十一時にはわれわれは、ボートをひっくり返して、嵐に対抗するために綱で固定するよう命じられた。この作業を初夜当直の終了を伝える鐘が鳴る午前〇時まで一生懸命に行なった。その時間になってわれわれは、深夜当直（午前〇時から4時までの当直）と交代し、ようやく解放された。私は下の船員部屋に行くのが最後になってしまった。そのときには、甲板上の次の当直が後尾縦帆を巻き上げていた。下の船員部屋では、新米の船員以外は全員眠りについていて、その船員は、以前煉瓦職人だった男で、肺病になり死にかけていた。海上灯がやみくもに揺れる動きは、船首楼の端から端までちかちかとぼんやり点滅する光を放ち、黄色い防水布上の水滴が金色に輝く液体状の蜂蜜のように見えた。船首楼の隅には、暗い影が現われたり消えたりしているようだ。視線を甲板に移すと、わずかな雲状の暗い部分の向こうには、エレボス（死者が通る暗黒界）のように真っ暗なところがあり、それはまるで洞窟に竜が潜んでいるみたいだった。スクナー型帆船がいつもより激しく横揺れすると、時折海上灯が放つ光は一瞬甲板を貫通しているようにも錯覚する。ところが横揺れがおさまると、甲板上は以前にも増して徐々に暗くなる。風の荒れ狂う音が索具（帆・帆柱・ロープ類一式）の中を通り抜けると、音が弱まったように感じられる。それはまるで、列車が陸橋の上をガラガラという音を立てて遠くの方に行ってしまったり、海岸に寄せては砕ける波の音が弱まるのと同様である。だが風上の船首にぶつかる海水の大きな音は、船腹と甲板上をほとんど交互に耳をつんざいているようで、船首楼を歩いてみるとずっと鳴り響いている。強風のためにスクナー型帆船が受ける過度の圧力により、肋材（船体の外形を形づくる構造材）や帆柱、隔壁（船内を仕切る壁）のキーキーとうなる音は、船員部屋の寝台で不安そうに寝返りを打つときに発する、死に直面している男のうめき声をかき消す役割を果たしている。また前方帆柱が甲板ビーム（甲板

を支える縦・横に渡された補強材)にあたって、多くのはがれやすい塗料が甲板上に落ち、嵐の音と重なりますます騒々しくなっている。海水が小さな滝のようになり、船首楼の上部にあるわずかな暗い雲状のところから勢いよく流れ込み、水分を含んだ防水布から出る水とぶつかる。さらにそれが、甲板上をものすごいスピードで流れていき、船倉(せんそう)(船の下部の荷物を納める所)の中へ入り込んだ。

深夜当直中の午前一時の鐘が鳴り終わると、「全員、甲板に出て、帆の数を減らせ！」という命令が、大きな声で船員部屋に伝えられた。

そうすると、眠そうな船員たちは寝台からあわてて飛び起き身じたくをし、油布製防水服に着替えて防水ブーツを履き、甲板上に出た。当直命令が寒々とした風や波の荒れ狂うような深夜に出たものだから、ジャックはぶ然として、「農場を売り払って船員になろうなんて、考えなければよかった」とつぶやいた。

強風が吹き荒れているのを実感したのは、息苦しい船員部屋を出て甲板上に出たときであった。強風はまるで壁のように立ちはだかり、船員でこった返す甲板上を移動することや、荒れ狂う突風が体にぶつかってくるので息をすることさえ困難に感じた。スクーター型帆船は、前方三角帆(フオーヌル)や先端下帆(メイニスル)の下部まで波立っていた。われわれ当直員たちは、先端下帆を降ろして、しっかりと動かないように固定した。まわりがまっ暗なために、われわれの仕事は大きく遅れた。黒い嵐雲が強風に押し流されてはいるが、星や月の光は依然として地上にとどいていない。が、自然の力はある程度、われわれに有利に働いた。やわらかな光が、海洋の生物から現われたのだ。無数の微生物の発する小さな光が、青白く輝き光の大洪水となって、広大な海はわれわれにこれでもかと感動を与える。波頭は曲線を描き砕かれる前に高くそびえ、一段と高くまばらになる。そしてついには、波頭はとどろくような音とともに防波堤に打ちつけるのである。多量の海水がやわらかく輝く光を伴って、船員たちをあらゆる方向に殴り倒し、甲板上の隅々に運んでしまい、すき間からわずかな光が照り輝き揺らめいている。次に来る荒波に倒された船員たちが洗い流されると、他の船員たちが押し流されてくる。時折、荒波が次から次へともものすごいスピードでやって来て、甲板上に大きな音を立てて激しく打ちつけ、舷牆(げんしょう)(船の甲板の囲い)のところまで水浸しにしてしまった。あふれた海水はまもなく、風下にある甲板排水孔を通じて流れ落ちた。

主帆(しゅほ)をたたむのに、われわれはすでにたたみ込まれた貧弱な前方三角帆(ジップ)の下のほうを、強風に後ろから押されるように、否が応でも急いでいかざるをえなかった。その仕事をやっと終わる頃までには、荒れ狂う海面が強風によってさらに押し上げられてしまっていたので、船首を風上に

向けてスクーター型帆船を留めることは無理であった。われわれは、甲板上のがらくたや飛び散っている水しぶきのあいだを強風によつて体が舞うように運ばれたのだ。けた外れの荒波がスクーター型帆船の後部を襲い、ほぼ横向きにしてしまったので、船体は大きく左右に揺れつづけた。夜が明けると、われわれは前方三角帆をたたんだ。これですべての帆をたたみこんだことになる。スクーター型帆船は風に乗って走行していたので、船首の上に荒波はかぶらずにすんだが、船のまん中の甲板上では荒波がとめどなく猛威をふるっていた。嵐は湿気をあまり含んではいかなかったが、それが強風と結びついて細かい霧のようになり、帆柱にある横木と同じぐらいの高さまで吹き荒れて、ナイフで顔面を切りつけるような鋭く恐ろしいものとなった。そのため、百ヤード（約九十メートル）を越えると視界はゼロであった。

強風が長いゆつくりとした雄大なうねりを伴って、大量の流れるような泡を生みだしているの
で、海は濃いねずみ色になっている。スクーター型帆船の荒れ狂うこっけいな動きは、急にスピ
ードを上げるにつれてたいへん不快なものになってきた。山登りをしているかのように帆船は、
広大な海の頂上に達するところでひよろひよると立ち止まりかけ、急に左右に揺れる。それか
ら、大きく口を開けている崖の前にしてびっくり仰天しているかのごとくにひと息つく。その後、
まるで雪崩にでもあったかのように、後ろから荒波が猛烈な勢いでぶつかり、帆船は前方へと急
降下した。船首は吊錨架ちゆうびょうか（船首部両わきに突き出した角材）の下部までミルクのような泡で覆い隠
されている。そして、その泡は、甲板のあらゆる方向にホースパイプ（船首甲板にあつて錨につい
たくさりが通る鉄パイプ）や手すりを伝わって流れ込んできた。

やがて風は徐々に弱まり始め、午前十時ごろまでにわれわれはスクーター型帆船を移動させる
ことを検討していた。その頃、一隻の船や二隻のスクーター型帆船、そして一隻の先端部が極度
に小さくなっている四本マストのバーケンティン型帆船を見かけた。午前十一時には、後尾縦帆スバンカーや
前方三角帆ジを張り、移動を開始した。一時間後にはすべての帆を張り終え、再び船尾寄りの波を
かき分けて、アザラシ狩りの漁場を求めて西方に舵をきった。

船員部屋の前の方では、海で葬儀を行なう前準備として、二人の船員が例の煉瓦職人の死体の
傷口を縫い合わせていた。嵐とともに、その男の魂も消え去ってしまったのである。